

## 文学博士北住敏夫君の「写生説の研究」「写生派歌人の研究」

### 「写生俳句及び写生文の研究」に対する授賞審査要旨

本書は北住敏夫君の近代文学における写生説や写生派歌人、写生俳句及び写生文の研究であって三冊より成る。

「写生説の研究」は昭和二十八年三月刊、昭和四十三年二月増訂刊行、「写生派歌人の研究」は昭和三十四年三月刊、昭和四十九年二月増訂刊行、「写生俳句及び写生文の研究」は昭和四十八年二月刊で約二十年にわたる研究の成果である。

「写生説の研究」は、序説に写生説を概観し、本論に写生説の成立、展開、意義を考察してあり、増訂版では子規の写生説、虚子の写生説、茂吉の写生説の三章を補っている。写生説の成立では、写生説成立の背景と基盤とを説くとともに、子規の写生説を考察する。写生という語に文芸理論的な意義を賦与し、それに基づいて文芸上の一つの主義主張を立てたのは子規であるとし、子規の写生説の成立した背景や基盤として、当時フェノロサらによって説かれた西欧の絵画論や中村不折らの絵画論の影響を受けていることを指摘している。更に写生説の展開として明治時代では碧梧桐と虚子との写生説、長塚節と伊藤左千夫との写生説を扱い、大正以降では、俳論をホトトギス派の写生説として虚子を中心として扱い、歌論ではアララギ派の写生説を島木赤彦、斎藤茂吉を中心として考察している。特に茂吉の写生説では宣長の玉勝間に見える「生写し」という語や中国画論における写生の立場を援用して写生とは実相観入に依って生を写すの意であるとするに至る経過を詳細に扱い、これに対する諸家の批判をも挙げている。「写生説の意

義」の章では写生説は時代思潮と関聯する一つの文芸理論であるが、歌人俳人の創作体験から来た制作技法でもあることを説き、一方写生主義の立場が写実の上に立脚しながら理想性を加えて来、更に短歌における写生ではある種の象徴主義に転ずるような方向もとられていることを指摘し、その点で東洋的性格を反映していることを論じている。増補のうち「茂吉の写生説」ではその写生説の美学的基礎を説いて心理学的な美学の影響のあることを指摘している。

「写生派歌人の研究」では正岡子規、伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉の研究を歌論と歌風とを関聯させながら行っている。子規の章ではこれを前期、中期、後期にかけて歌論と歌風との関係を考慮しつつ、その展開過程を扱っている。子規が万葉集を重んずるとともに新古今の絵画的な点を認めていたこと、和歌と俳句との関聯を重んじたことを指摘している。左千夫の章では歌論と作風と伝統とにわけて扱い、歌論において左千夫の説く言語のひびき、言語の声化、表現、叫びは声調を第一とする考であり、彼のとく写生も声調による感情の具象化であるとしている。長塚節の章では道程と歌境とにわけて扱っており、補説一の「冴え」については冴えは節の晩年になってからの説であるとし、それは澄明透徹の美であり、節の歌は「冴え」という点で彼ほどの境地に達した人は求め難いとしている。島木赤彦の章では初期の作品からはじめてその歌の展開を扱っており、補説二で節と赤彦との写生説を比較し、節が事実を重んじたのに対して赤彦の写生は外的事象の描写よりも内的生命の表現を重んじたとしている。斎藤茂吉の章ではその写生説を更に検討し写生論と声調論との関係を考察して新しい見解を立てている。

「写生俳句及び写生文の研究」では第一部写生俳句の研究、第二部写生文の研究とにわけ、それぞれ考察してい

る。写生俳句では日本派の写生俳句を子規を中心として摸索期、草創期、發展期、完成期の四期にわかつて考察し、ついで明治時代における碧梧桐と虚子との俳句を扱い、更に大正昭和時代における虚子の俳句を考察している。写生文の研究では写生文の成立とその作品とを考察し、ついで写生文の發展として、写生文から虚子、左千夫、節らの小説への發展をとき、更に写生文派の隆替をとき、終りに漱石の写生文として、漱石初期の作品を写生文の立場から扱っている。

以上の如く、本書は写生説、写生派歌人、写生俳句、写生文を純粹に學術的對象として組織的に扱い、多端な写生の主張とそれにもとづく實際の作品とを遺漏なく解明している。まず、文芸理論としての写生説の成立と發展とを正確な資料によって追求し、次いでアララギ派に發展する歌壇の状況を主な歌人の作品を的鑑賞し批判することに よって展示している。終りにホトトギス派の俳句について綿密にこれを行い、写生文の流れをも詳しく跡づけている。子規はもと想像と並んで写実を重んずる立場から写生を奨励したが、これが門流の間に繼承された結果、虚子の説く客観写生、花鳥諷詠の如き俳句独特の東洋風な芸術観に達した。また歌壇では茂吉の如きは実相観入、生命直写の境地を説き中国画論における写生も生命の象徴と解釈され、自然自己一元の生を写すことが感情移入によって説明されるなど、西洋美学の援用も見られるに至った。もと自然主義の傍流とも見えた素樸な写実主義がここで著しく理想化され、深奥な哲学的宗教的な色調を帯びることとなった。

このような点を北住君は見事に闡明して写生説の文芸思潮における意義をよく把握している。資料の博搜、史実の整理についても遺漏なく手をつくしてあると見られる。文芸に対する深い理解力と、これを体系化する綜合力とによ

りすぐれた成果を挙げている。